



寶鑑海寸全

~ 5  
5649



門へ5  
號5649  
巻

東海道の一すも又好記しつら  
かゝる心にあつては  
走り夢に夢か何れも  
を操りてやまふ今幸に東武に在るを  
換ふはさ今今とあひて  
あつたは是やゆえに  
月あのをとい良倉の  
い懐せとたつて



のまゝとて一高好のえなむけりし折  
けしの子をひをも連環しぬら丁字  
頭位物とるなりさるをいそ浅魚のぼ  
てんやと侍ぬの丁字もさるけりぬ  
ねてさるまよさるし月とさるしと  
するまらあさるしと

己保十三

壬寅孟春日

山公儀 

冬景并集

送山公東武行

慶五

別とてまねのし集の根分時

雨凌更

孫実とてさるる船の終山公

夏とて好の府折多とて東鶴

新とて車とて並けぬ折下関楚

且山とて山とて月とて白やうとて木屑

空の道やうき花のうらみ白 赤鱗

つらふ山を折るも西風の雲は花 一草

同者をとらうと神のあまを少 舒雀女

との後まゆみ深のきけり沙汰 石風

経る山を折るも天のうらみ 一峯

雪をかきうらみうらみ 女中とよ 松代女

袂に折るも 雲 山曙

月をいりうらみ月利の生 青 兼堂

侍る序よ 花子とまきうらみ 笑道

雲石二の緒をうらみうらみ 卯角

茶をうらみ酒をうらみうらみ 柿堂

あま多き花の雲は葉内先 麦映

花をうらみうらみうらみ 楠 筆

苗別

兄をうらみうらみうらみ 山公

歩道のうらみうらみうらみ

筑前

春の折や梅もよもぎの如く服のそよ  
 人まろく暮るるもかき去の山  
 春訓も糸終りや春の至  
 梅もよもぎの如くしぬ琴の床  
 消ぬるもよもぎの如くしぬ  
 人をよもぎ掃除しぬ来るはるは  
 友もよもぎおろくもよもぎ

宇逸  
 仙沙  
 雨堂  
 尺步  
 席賸  
 飛木  
 蒲水

不もよもぎ酒経経る空の初春  
 裸もよもぎ也さかきもよもぎ  
 元日の物筭用や自と不

斗丈  
 宇甲  
 石外

豊前

清音やもよもぎの如くしぬ  
 押もよもぎの如くしぬ

木父  
 接尾

長門

云合りもよもぎの如くしぬ

峯丸

周防

登崎く 崎く 郭 公 素兄

集く 招く 崎く 崎く 崎く 好々

安藝

招く 崎く 崎く 崎く 崎く 聖頂

又 崎く 崎く 崎く 崎く 槐児

中 崎く 崎く 崎く 崎く 露巖

備后

招く 崎く 崎く 崎く 崎く 梅路

去く 崎く 崎く 崎く 崎く 古峯

備中

色 崎く 崎く 崎く 崎く 香雨

備前

崎く 崎く 崎く 崎く 崎く 涉川

崎く 崎く 崎く 崎く 崎く 布國

山 崎く 崎く 崎く 崎く 崎く 北年

一羽来り新樹よかむ鳥か  
涼乎  
水仙やをそのくみみく本戸の内  
雅卜

播磨

虎の膝 伝舞はるまよ舞はるま  
一香  
以波の袖くく霞むゆら霞む  
道山  
龍巻の骨のく結く本の方か  
曾夢

摂津

田の水けぬくわやう山を揺る  
冷豊

二高鶴さくく雪かきく鶴子の琴  
其山  
掃袖や船の埃くく霜斗り  
煮屋  
山城のくく鐘さくくやきき秋  
月桂  
高子の中へ流きく小川か  
耕春  
名まらうく雪かきく山を揺る  
清竹  
生くと恵するまむくや海海を  
松母  
家かきくまらうく雪ありあきく  
祇白  
秀かきく結く川かきく日か  
白鷗

水鳥や 養を ありては ちかき 糸 鼎丸

春菜も ありては ちかき 鳥が 二笑

出く 形も ありては ちかき 地り 冬岐

河内

号は 意を 城へ 垣一 重 不二門

山城

高の かりと ちかき 一日の 小春が 蒼此

ちかき ちかき ちかき ちかき 福寿亭 梅室

数入や 里の 遠き ちかき 柳の ちかき 萬籟

夕晴や ちかき ちかき ちかき 柳の ちかき 柳絲

ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 杜蓼

山一 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 芥舎

ちかき ちかき 鴨子 目の ちかき ちかき ちかき 梅通

ちかき ちかき 水や ちかき ちかき ちかき ちかき 吾朗

ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 梅價

ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 杜鰐



高きわや梅香とつる斗り 岱年  
 百遠き空の字さやむりの字 黙池  
 抄りくまゝ海の日と馬も小鴨も 菊節  
 一二つ々んとあつゝ清水も 並隆  
 ありくや砂も拂ひを孫の上 卓丈  
 香もとまゝむらんや一あはれ 芳英  
 香ふくや花も香もあつゝくも 南溪  
 紫のトやあつゝ花もあつゝ 九起

先へゆく幼日ゆかり晴の星 丈翠  
 ともくくまゝあつゝ花もあつゝ 岳鳳

近江

清りくとまゝゆきや萩の元 九奇  
 幼下の折り糸も人よあつゝ 砺山  
 煉掃や紙もあつゝ梅のともや 芦一  
 白き粒一入萩のあつゝあつゝ 釣江  
 ともはなやあつゝあつゝあつゝ 菫菁



招の萩ふむやえく歯下詠く 雲石  
星の灯と水の灯はちや萩の夜 兼圃  
星をくみよさなよしと水川 梅暎  
別と萩とふりといひりう洞代ち 崔叟  
多くあめく萩をくみよさなや萩の煙 一幽  
野と山と嶺一ツりあふ萩の 固叙  
春のうね水さるるぬるう那 方汀  
朽く退く萩をくみよさな萩の月 流芳

夕暮の多くうね萩の 都波雄  
夕暮の多くうね萩の 杜蘅

尾張

やむと萩と萩の本がりの力ど 沙路  
萩の萩と萩の萩と萩の巨魁が 黄山  
萩の萩と萩の萩と萩の萩の萩 應知  
よふ萩子の萩の萩と萩の萩の萩 我竟  
萩の萩と萩の萩の萩の萩の萩 松鳥

揚沈の千子好子出づりあ 岸 芝石  
名月やあけく川をこころる 一清  
すくすの千洞の切を流る四りか 鵬居  
長藤と川をくちるや 月座  
おくく手短か思ふや冬の月 而后

三河

若水まゆやき川や山うはら 卓池  
まの塔や夕日と云くふ高より 流芝

ちーり炭岬の古を流るくり 墨馬  
けうぬ樹の如く竹のまき橋ぞ 石采  
春柳や四身軒 何れを一互ふ 青可  
人さしきすくぬのしき 幼鳥 完伍  
勢流るおほきまけしや峰の麓 六蟬  
空の山ほりくそまは橋の麓ふ 朱芳  
ちえくやあま花の白やうり 三岳  
畑もささくまつらぬ柳 蓬宇

一葉ソヤ〜〜あやあ 赤楨 水竹

遠江

本巻や石川とゆききそのは 貞山  
海と千ハ一ツラの中 水 石 為中  
松明振と物いづる者物物 都水  
梅〜の薊さきさきと梅 青美  
下ささるるの通さぬ者 其葉  
とさしとさくあさ〜と池の筈 清鼻

日わさ〜〜あ〜のひ〜 且松

駿河

ららあ〜〜毒〜とえさあ天の川 自蓬  
大ま〜〜あ〜〜と也や雪下 碧山  
梅あやあ〜〜とさ〜 南輝  
あ〜〜とま〜〜とあ〜〜の虫 井指  
あ〜〜とあ〜〜とあ〜〜 仙壺  
河仙の屋根と日何り好〜 高峯

青雀  
 伯耳  
 墨平  
 對珠  
 有麟  
 仙菜  
 連巴  
 徑路

密雀  
 黍且  
 見路  
 連山  
 伊豆  
 惠人  
 吳牛

相摸

青く〜とる葉もさする着る子ぞ  
 立宇  
 何とあふあもあ〜何とあふあ  
 獲壘  
 然と〜猶あま〜猶〜あふあ  
 一猪  
 切れ中の足跡清うあ〜あま〜あ  
 竹心  
 峯のねえ〜あ〜あま〜あ  
 達笑  
 初雪の降〜あ〜あま〜あ  
 對笠  
 日〜千〜さ〜あ〜あま〜あ  
 麟角  
 杖〜あ〜あま〜あ  
 丸沙

何とあふあ〜あ〜あま〜あ  
 観堂  
 万葉〜あ〜あま〜あ  
 素笠  
 天〜あ〜あま〜あ  
 文呂  
 夕やけ〜あ〜あま〜あ  
 麴車  
 玄智のあ〜あま〜あ  
 気條  
 何とあ〜あ〜あま〜あ  
 凡和  
 深切あ〜あ〜あま〜あ  
 羽扇  
 又あ〜あ〜あま〜あ  
 牛巧

手のとくくまをくく交るう山の月 芳十  
 春の水や川とくく流せし 吳丁  
 晴くく招の文法をくく漸うか 兼秋  
 親のあまきくくく舌傳口茶く 槐堂  
 梅くくのく田くくくくくく自招く 静風  
 好き火やあくくくとあふありあき 丹堂  
 梅のまゝ百姓をくくくくおうくくく 白岭  
 菜の條を流くくくくくく幼乙を 宜頂

志くく移きくくくく招と菊くくく 如々

武藏

物くくをくくくくくく志まひぬ春の風 竹山  
 二階くくくくくく歩下くく通くくく 李香  
 晴くく籠子のくくくくくくあり月の 涼松  
 十六折やあくくくくくく山流と 青荷  
 梅くくくく海の面くくくくく 寄三  
 花の香くくくくくくくくくくく 南々



物の島は常洪くくちりより  
 梧青  
 ありくとつちや 折々の梅の五葉  
 正份  
 灯とのさくや 鳴るる音きくぬ中音  
 杉曉  
 阪粒もるる梅のつら梅の葉  
 汶平  
 懶鈍くちりりり ちちちりりり  
 多行は  
 しんくちやま 踏る葉のつら柳  
 五渡  
 雪の妙やいづれ 春の形  
 碩布

雪や 鳴る梅のさき梅の葉  
 護物  
 風中鳥の鳴る梅の葉  
 木木  
 ちんくちんく 葉のさき梅の葉  
 山外  
 梅のつら梅のつら梅のつら  
 為山  
 さきもさきも 葉のつら梅のつら  
 杉居  
 ちんくちんく ちんくちんく ちんくちんく  
 伯遠  
 梅のつら梅のつら ちんくちんく  
 丁知  
 ちんくちんく ちんくちんく ちんくちんく  
 抱儀

一具  
 粗支  
 氷瓶  
 仁宝  
 荷水  
 護岳  
 知聖  
 卓郎

遠流  
 縁瑞  
 三和  
 巢居  
 水由  
 英文丸  
 得甚

晴くく川向の江邊へ暮らう家 碓嶺  
 料簡なるや所々をわらう松が 麻支  
 夕暮や影さまじくか暮の丁 南坂  
 志別くとも山をうける暮が 素瓊  
 暮うけく志まじくの夜や松の谷 味舎  
 暮すくくもさう暮くく 賦の筆 卧息  
 暮中二相くく松くくも暮らう 除力  
 夕陽やまじく暮らうも暮の丁 小柯

万葉の下ゆき古風ハ跡りく家 祖心  
 地中と遊る夕川や二月三月 月芳  
 大くくく松くく暮らう 暮の暮 大之  
 夕くく松くくもさう暮らう 采山  
 松葉や暮らう暮の山も家 杖國  
 七夕や夕暮の向松かくもさう 仙危  
 以松揺くく松くくもさう 波同  
 折うけくもさう月と松くくもさう 撲翁

七種の花子 庭の茶粥うり 惟草  
 号を歩ふや 一りり 大鵬  
 うう 梅子 鼻はき 命は地うり 雨兆  
 日さすま 遠く 猿月と ぬるり 梵阿  
 余のそよ 花 青く 然り 李瓊  
 不ふく 花を 枝形 の 山形り 南 秋香  
 とけやう 一 瓶 花を 一 相一葉 筌吏  
 春と 一 一 一 一 一 一 二柳

揚かろうや 庭の上 花の香 玩甫  
 星と 一 一 一 一 一 一 是仏  
 門松の 一 一 一 一 一 一 琴雅  
 鳴る 一 一 一 一 一 一 萬頃  
 竹場と 一 一 一 一 一 一 資喬  
 如白や 一 一 一 一 一 一 谷坊  
 生海苔の 一 一 一 一 一 一 梅差  
 四五本の 一 一 一 一 一 一 溶々

三ヶやうの流丸に石の色道が 天馬  
 日のこゝろ籠の号も山をふり 杜有  
 号の音あふりしうらちのうら 祀久ち  
 何ううらねあふりしうらちのうら 由誓

月う日の影のりせりし雪の上 <sup>雪水</sup> 天遊  
 梅の葉肉をふりしうらちのうら 箕年  
 山川や海のうらちのうらちのうら 可大

梅のうらちのうらちのうらちのうら 芦滴  
 三西里うらちのうらちのうらちのうら 良台  
 垣文のうらちのうらちのうらちのうら 五株  
 山かくは石のうらちのうらちのうら 素行  
 野うらちのうらちのうらちのうらちのうら 佳峯  
 黄のうらちのうらちのうらちのうらちのうら 平山  
 年うらちのうらちのうらちのうらちのうら 竜風

春の月 那やうくくく 錦枝女

那高きくくく 喜縁

咲りくくく 四山

春の勢を 春鶴

春のり 揮長

袖の 梅溪女

子 貞直

籠の 風外

異 逸測

以 菴心

比 洞天

此 聞二

比 若海

年 采文

遠 十荷

何を部と云ふと名を知らずの川 壺天  
 雪の降りたりと里山 乙雄  
 雪の降りたりと里山 乙雄  
 海苔の露をけむるもあうりりり  
 成免  
 吹のさけぬのわらやま 素元  
 兄達とや 義のくらうんハ重松 芳ち  
 梅の香の初みり 風もあうりりり 百和  
 ぬれは子あうりりり 本の草む 駿臺

大いの中 葉 難本の中やゆき  
 樹村  
 雪の降りたりと里山 乙雄  
 秀五  
 やつとらと雲く 東や梅の母 月恋  
 春風の海へ 吹くり 芥子 芳春女  
 梨の花やうりりり 柳 秋葉女  
 雪の降りたりと里山 乙雄  
 霞栄女  
 梅の白い葉や 川六 富六 此扇  
 雪の降りたりと里山 乙雄 雨後









佐原

江月

郡

幻芝

宇都宮

其翼

塵外

日光

又々

又々

又々

山公

鳳鳴谷止齋

又々

延州場子字

又々

東地よりゆく風の更なる

鳳朗

間接きくし雲華備の歌の后の月

高しきまきりく 暮る 巻 栗 山 公

高しき高結はくしあき 安きくし 真 斎

手は移る板のす屋くしきく 永 久

昆布ふく糸 漢 綿 袖 の 梳 巾 子 呂 叟

河 孫 け ぬ ぐ ぐ 口 拭 ぐ 暮 る 晨 支

空 或 け 通 る の 途 い 莫 玄 孫 竹 烟

白 如 く 一 緒 く 沙 々 又 吐 秀 在

水 衣 子 奔 走 子 泣 如 く 少 雪 冬 千 斎

火 を 如 是 烟 若 多 如 く 暮 る 馬 朝

網 の 首 々 如 此 の 如 け け 風 雨 如 公

紅 顔 の ま じ ゃ 一 紅 顔 の 暮 る 物 真

皆 の 暮 る 大 小 一 年 周 る 月 久

冬 屋 子 如 一 如 暮 如 朽 如 叟

芙蓉の葉を茶の柳葉の味をうり  
 今良場のりたよりいへば  
 初葉を心うねるを蒼みく  
 本地の味は雨のひびく  
 寺の味はあまうるを茶  
 寺の味を和らぐをい  
 梨はりて一膳にせし大掃除  
 万葉の神の記よんがさるる  
 支 烟 直 千 朝 公 真 太

燃やす煙をのりていへば  
 其日まじりのりね動定  
 丁字をかきくさるる通るる  
 玄猪の味はうを焦のさる  
 多き好みの自神上の味は  
 ちりたりとるる青の梅天  
 菊の葉の葉外伸と月  
 香より浅黄の和人のりと海  
 支 烟 直 千 公 朝

頬白をむらうもむらう白の岸  
 あり海つゝ紅毛の沙汰  
 龍舟を引く船つぎの七手揃  
 けらゝ〜程は本陣に上る  
 無勢をかゝり石をくは海下  
 月が谷を〜と伝説する 燭  
 烟

成程おたむけな時と揃う  
 恋ひしとる

卯きぬ〜と見つゝ紅籠の美形も 風朗  
 辰 雲むのけおまゝ〜船や櫓の影 文老  
 巳 心ちや伝説抄〜と玉のそら 呂叟  
 午 糸巻や何とあう〜午日の去下 山公  
 未 永き日も多ゆ〜せ〜とのあひ 樹村  
 申 女房ま〜と袖引や話のま 千奇  
 酉 辻君の壺の沸〜と極うゆ 秀直  
 戌 籠抱〜と山香の會指を 逸淵



高々々々々の如く切らるる是を布  
おろく指てぬる善化ちの犬  
峯入のちうらみもさぬ杖突く  
唱へ山ありて鳥の如く泣く  
味淋湯を疎つらぬる籠の友  
さひいと神もあぢきとやう  
方々に夕暮も切り目、何て  
お構へぬらちうらみ 嘆き

公 淵 公 淵 公 淵 公 淵

れきく指もささぬ 菊 山  
さうりやまのうらみ 雲  
有寂もささぬ 是を切らぬ  
聲のふりて遠見もささぬ  
あらさぬ 顔の整のうらみ  
あつらぬ 指もささぬ 打  
善法場の木片に指もささぬ  
遠年々のうらみ 雲

公 淵 公 淵 公 淵 公 淵



粟乞とちよゆと垂の張る二葉約  
 桿菊うけと移結し往く来る  
 ちりくと修く心替る山の月  
 故生寄るちありぬ養の移  
 ちと結るちとよゆのやまぬ古鞍橋  
 やと結るちとよゆの養の乳  
 福徳の養生あらゆふ自中さ  
 親田くく流を井を引く  
 公 淵 公 淵 公 淵 公 淵

嘆れせぬ節々移うくまやくと  
 ちりくとよゆの利と胡葱  
 法つらく水の三流や流と川山  
 取うくよとよゆの養の心と音山  
 難勝す持ぶく酒の酔ふめく  
 自中を分るぬ来下の心這入  
 あひの換り流す月とあり  
 公 外 公 外 公 外 公 外

芳子ゆきせしはとよ邸こ  
しきく略実やうく下男  
あきくも帯とぬの物好  
さきくゆきおのりやまぬたう後  
按さ鼻石のけを煮し記  
牛堀の原くくとたぐく小風高き  
流流りきし所け桶の藤  
月又くも顔うらの外さま流  
外 公 外 公 外 公 外 公

藤さきくもゆきおのりやまぬたう後  
按さ鼻石のけを煮し記  
牛堀の原くくとたぐく小風高き  
流流りきし所け桶の藤  
月又くも顔うらの外さま流  
外 公 外 公 外 公 外 公

暖笑ニ重ク如ク一桑 口

外

振賣のりくの者々河持も有り

公

あふ世に少くも月を如く重

外

たぐく浪うちうけの聲も格

公

寺の物もさくく 徳 云々

外

肩のより却の一より忘るる

公

柄うくやうの子々之に 結

外

生玉も生ずも不つく糸 子

公

海島町を思ひ 山 切

外

究一の法度 福 集るる 珠

公

養治とくく 世法をやうせ

外

舟をゆき不とれと舟もあうら

公

洞にやうに子々く山 子

外

埃土の集り 以 送るる 中

公

響と物々く 鳴るる 義 入

外

諸邦

枯うゝ葉の葉山なまや跡る葉房壺玄

うがうそくをみゆく名を松心 太朗

清く心よしゆくまのゆくを海に上サ著我

澄切くむそくを井き清水ヨク 仙孫

能くもや松心ゆくまのゆくを海に 雀鳴

懈のゆく心ゆく分る足くまのゆく 晋史

凍つゆく雪ゆくちきゆくまの葉心 存可

池あはれと水々たるゆく松のゆく 心何

芥の根はゆくのゆくを海に 江三

招きゆくまの葉ゆくゆくまのゆく六玄子

葉の中 菊のゆくゆくまのゆく 二丘

本ゆくゆくまのゆくゆくまのゆく 稻州

梅柳世界一葉をゆくゆくまのゆく 御風

雪中へゆくゆくまのゆくゆくまのゆく 雪貞

電の光と朝まじく角の光まじり  
 空鮮  
 好うわやちりま埃うまなぬら  
 其柅  
 てもや藤うまな人後引かせ  
 化鵬  
 藤獅子の舞はよく春の風  
 由之  
 老うと心し多うまう海りま季<sup>上毛</sup>  
 西馬  
 舌りつとまうまなとまき船後  
 沙来  
 大鳥の小鳥まじりつらまじりまじり  
 洒島  
 木更敷のつらまじりまじり九月が  
 百身

好うわやちりま埃うまなぬら  
 其柅  
 てもや藤うまな人後引かせ  
 化鵬  
 藤獅子の舞はよく春の風  
 由之  
 老うと心し多うまう海りま季<sup>上毛</sup>  
 西馬  
 舌りつとまうまなとまき船後  
 沙来  
 大鳥の小鳥まじりつらまじりまじり  
 洒島  
 木更敷のつらまじりまじり九月が  
 百身  
 好うわやちりま埃うまなぬら  
 其柅  
 てもや藤うまな人後引かせ  
 化鵬  
 藤獅子の舞はよく春の風  
 由之  
 老うと心し多うまう海りま季<sup>上毛</sup>  
 西馬  
 舌りつとまうまなとまき船後  
 沙来  
 大鳥の小鳥まじりつらまじりまじり  
 洒島  
 木更敷のつらまじりまじり九月が  
 百身  
 好うわやちりま埃うまなぬら  
 其柅  
 てもや藤うまな人後引かせ  
 化鵬  
 藤獅子の舞はよく春の風  
 由之  
 老うと心し多うまう海りま季<sup>上毛</sup>  
 西馬  
 舌りつとまうまなとまき船後  
 沙来  
 大鳥の小鳥まじりつらまじりまじり  
 洒島  
 木更敷のつらまじりまじり九月が  
 百身



疎のこえんくく屋よりり門の隣 白斎  
 湯よりや梅の影はあけり 立左  
 見若くくあの人馬の影は生る 葛古  
 才分り花の持や梅の影 椿嶺  
 月明きくはるく系事る 茶外  
 山の雪淺き春と梅よりり 人丸  
 袖より梅の影はあけり 子も成る 圭國  
 花の影はあけり 春映

小舟りともく世ひより梅の影 能村  
 元日は春の影はあけり 月外  
 折る雪の影はあけり 敬斎  
 雪の梅の影はあけり 中節  
 梅の影はあけり 梅塵  
 雪の影はあけり 業  
 梅の影はあけり 始々  
 梅の影はあけり 布青





角カ多世々心口うく世入り也 北洋  
古きく世先く昔ふのいと紙 茶山  
塚一ツ三つ世々くくぬ井内 乙良  
鳴うくく一沸くき略の夕アが 義珍  
空く寒く片くくく江や山の鏡 た子雄  
一ト変てお一おおるや春くくく 春室  
くくくやゆあひくくくく藤の夢 安雅  
古話やけいやくくくおくくく花ご 落村

雲斗りおとのを江や幼くくく 姫山  
世の繁もつゆくくあらんや降く霞 素紋  
響の葉ととりまぐ世のくくくく 風方  
ふけと暮ぬ花や海山の茶あかん 年緒  
静の葉くく昔くく牛や古の竹 半瓶  
赤山くくや片くくく四くくく 龍の雪 湧漬  
日のうらわく山あうくくく 伝の月 寸風  
久くくくくくくくくくくく 仙兄

蓬萊千石一石と遠く遠く子<sup>フコ</sup>路方  
 すーまはら子<sup>アキ</sup>打と並に象<sup>アキ</sup>分<sup>アキ</sup> 菖池  
 月の白あつてもうか<sup>アキ</sup>とありき 露泉  
 青島は山と掃と鬼ハ外 風棲  
 膝一四の鳥を梅の匂ききり 斗南  
 烏帽子子<sup>アキ</sup>と掃と心や<sup>アキ</sup>が<sup>アキ</sup>葉<sup>アキ</sup>ハ 可談  
 春と秋と海氣存分伸よりり 葉葉  
 春のや<sup>アキ</sup>子<sup>アキ</sup>と生<sup>アキ</sup>一<sup>アキ</sup>松<sup>アキ</sup>の<sup>アキ</sup>特<sup>アキ</sup> 太拳

朝露とやあつても子<sup>アキ</sup>七<sup>アキ</sup>林<sup>アキ</sup>の<sup>アキ</sup>為<sup>アキ</sup>之<sup>アキ</sup> 有問  
 まつるや<sup>アキ</sup>掃<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>清<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup> 万像  
 何と<sup>アキ</sup>き<sup>アキ</sup>は<sup>アキ</sup>子<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>午<sup>アキ</sup>一<sup>アキ</sup>重<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>何<sup>アキ</sup> 應吏  
 意の<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>子<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>清<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>白<sup>アキ</sup>の<sup>アキ</sup>林<sup>アキ</sup> 躍<sup>アキ</sup>湖<sup>アキ</sup>  
 幼<sup>アキ</sup>林<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>子<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>清<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>白<sup>アキ</sup>の<sup>アキ</sup>林<sup>アキ</sup> 木長  
 揚子<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>子<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>清<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>白<sup>アキ</sup>の<sup>アキ</sup>林<sup>アキ</sup> 今是  
 林の<sup>アキ</sup>招<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>子<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>清<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>白<sup>アキ</sup>の<sup>アキ</sup>林<sup>アキ</sup> 茂推  
 朝<sup>アキ</sup>露<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>子<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>心<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>清<sup>アキ</sup>と<sup>アキ</sup>白<sup>アキ</sup>の<sup>アキ</sup>林<sup>アキ</sup> 常居<sup>アキ</sup>



一  
 一  
 一



水子あき川よちうとびゆらぐ 双鳥  
 名草摘ふらむとく 野うさぎとらり ヒセン 悠々  
 松蔭中 年々子訓く 咲く 嶺 眉山  
 芽蓄まうり 葉うま 体高 多 十力サキ 駢童  
 煙子火のまをくけ 葉中 栞の玉 干江  
 朽枯く 着く かけ 中 葉乃 世 岱雲  
 珍作らるる 雲か なく 子 神 何 句 甫 田  
 田の時中 花の 子 月と 流る 鴨の 柳 上島 菜尾

米舟連

花多し かけ 中 始 台々  
 柳 花 中 花 中 庭 馬 朝  
 少 花 中 花 中 花 中 庭 鳥 仁  
 明く 花 中 花 中 花 中 庭 角 羽  
 水 崎 中 花 中 花 中 庭 文 老  
 持 中 花 中 花 中 花 中 庭 琴 舎  
 不 是 中 花 中 花 中 花 中 庭 不 女

くらり〜 ぼろ〜 藤島  
 橋持〜 住〜 新〜 妻の橋〜 虚山  
 藤島〜 日〜 水〜 春遊  
 七物〜 夏〜 宮〜 秋〜 琴陵  
 古の水〜 人〜 川〜 流〜 棧  
 汗〜 有〜 千〜 高〜 水〜 日〜 子友  
 吾〜 命〜 中〜 砂〜 千〜 ま〜 丸〜 磯  
 温 管丈  
 崎〜 橋〜 子〜 存〜 子〜 所〜 々〜 志〜 山  
 逸雨

抱羞とあら〜 也〜 中子〜 枕 東鶴  
 一松と男〜 毛〜 う〜 丸〜 田〜 極 也 兼堂  
 水門〜 千〜 ま〜 ま〜 丸〜 一〜 枕〜 一〜 城〜 也 舒雀  
 三〜 三〜 三〜 三〜 思〜 一〜 一〜 一〜 一〜 上 松代女  
 義入の子〜 穢〜 息〜 々〜 芽〜 花〜 也 笑道  
 あり〜 一〜 と〜 空〜 の〜 ま〜 り〜 中〜 也 浮 植 赤鱗  
 中子〜 々〜 々〜 の〜 々〜 う〜 丸〜 相〜 為〜 也 関芝  
 藤橋〜 也〜 々〜 結〜 人〜 々〜 々〜 志〜 の〜 形 杜有

正身や月後を歩け持持ひ 麦映  
 冬枯や人里遠き鳥の聲 和戎  
 春の鳥々入人迹し雪の家 立格  
 至月うき日摘撰くまおろり空 文月  
 折竹うきお花の又う折し之日 吐雲  
 炭層の竹千折くまおろりり 一峯  
 町中らの海色の素終蕪の至 一風  
 葉一把葉蕪しぬ小折千鳥 卯角

乙嫁の身像と足さく代新び 柿堂  
 春余さやそさくあけ人のけ 野雀  
 帆からるる千舞くさひきあけ 雪朝  
 名のあるぬきくおま持本の子が 木屑  
 七揮くそと揮く 養 枕 夢五  
 日や月の老りまあさる操う神 山公  
 當分の鳥々くさひ多しお徳う軍

其より中より分考の日より

風朗

根柢の土の腐りたるは山公

振雲の貝壳細工をりて晨支

望望と通り川 然るあり朗

翠作の重なるありては公

又答の中より葉子の粉より支

夏杓子かハ人登りて生れし朗

思ふ折りては折下りて公

心ゆく鏡のうらみは支

串子に核は是れなりと朗

派は海仙墨縁をとりて公

祥つらふ年忌をりて支

一降して春夜より月より朗

島の縁より縁取より公





暮の書きつゝの山と結代り  
 ちのし降しそはなたるまは  
 新羅病にうつるゝ如珠をと探魚く  
 牛の角に印する 子  
 鳴鳥子烟紙たけぬ 里のあはれ  
 命子小命子多きかた 支  
 支 公 朗 支 公 朗

各十二句

あゝ中世山と袖をこし来しふ一恋と  
 えゝるゝを婦あはれと志はねむのゝ縁  
 伴はしにみゝ来ぬまき法一物は  
 鳴ししよ光る西のやね更なる未の  
 口はあゝくのゝをうたふ空の女をさ  
 めをさき珠をよゝ共予不話やまの  
 来つゝと命をぬくし量にいはれ

多幸の地年あやうから。流す海に  
又と兵さよは回りの海。口をさし  
ふ地を免れし。祐をすまふ世に  
神と記す。記す。

真  
印

此の地は昔より名を知らず。其の地を  
見れば。昔の地を知らず。其の地を  
見れば。昔の地を知らず。其の地を

